



Japan
Food
Research
Laboratories

試 験 報 告 書

第 208092266-002 号

2008年(平成20年)11月11日

依 頼 者 日 鋌 工 業 株 式 会 社
 株 式 会 社 マ ッ キ ン リ ー
 宝 永 電 機 株 式 会 社
 ミ ツ ヤ テ ッ ク 株 式 会 社

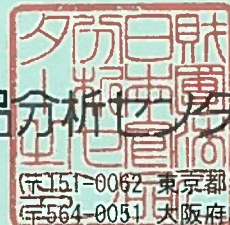
検 体 CELA水 pH6.5 50ppm

表 題 殺 菌 効 果 試 験

2008年(平成20年)09月22日当センターに提出された
上記検体について試験した結果は次のとおりです。

財団法人

日本食品分析センター



東京本部 〒151-0062 東京都渋谷区元代々木町52番1号
大阪支所 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町3番1号
名古屋支所 〒460-0011 名古屋市中区大須4丁目5番13号
九州支所 〒812-0034 福岡市博多区下呉服町1番12号
多摩研究所 〒206-0025 東京都多摩市永山6丁目11番10号
千歳研究所 〒066-0052 北海道千歳市文京2丁目3番
彩都研究所 〒567-0085 大阪府茨木市彩都あさぎ7丁目4番41号

殺菌効果試験

1 依頼者

日飯工業株式会社
株式会社 マッキンリー
宝永電機株式会社
ミツヤテック株式会社

2 検 体

CELA水 pH6.5 50ppm

3 試験目的

検体の細菌に対する殺菌効果を試験する。

4 試験概要

検体に枯草菌(芽胞)、大腸菌(血清型O157:H7, ペロ毒素 I 及び II 型産生株)又は黄色ブドウ球菌の菌液を接種後(以下「試験液」という。), 室温で保存し, 経時的に試験液中の生菌数を測定した。

なお, あらかじめ予備試験を行い, 生菌数の測定方法について検討した。

5 試験結果

結果を表-1に示した。

なお, 試験液をSCDLP培地で10倍に希釈することにより, 検体の影響を受けずに生菌数が測定できることを予備試験により確認した。

表-1 試験液1 ml当たりの生菌数測定結果

試験菌	対 象	生菌数 (/ml)				
		開始時*	1分後	5分後	15分後	20分後
枯草菌 (芽胞)	検 体	8.8×10^6	5.2×10^6	1.7×10^3	40	20
	対 照	8.8×10^6	5.1×10^6	7.6×10^6	5.5×10^6	7.6×10^6
大腸菌 (O157:H7)	検 体	2.4×10^6	<10	—	—	—
	対 照	2.4×10^6	3.2×10^6	—	—	—
黄色 ブドウ球菌	検 体	3.4×10^6	<10	—	—	—
	対 照	3.4×10^6	4.6×10^6	—	—	—

<10: 検出せず

対照: 精製水(黄色ブドウ球菌は生理食塩水)

保存温度: 室温

* 添加菌液の生菌数を測定し、試験液1 mlあたりに換算した。

—: 実施せず

6 試験方法

1) 試験菌

- ① *Bacillus subtilis* NBRC 3134(枯草菌)
- ② *Escherichia coli* ATCC 43895(大腸菌, 血清型O157:H7, ペロ毒素 I 及び II 型産生株)
- ③ *Staphylococcus aureus* subsp. *aureus* NBRC 12732(黄色ブドウ球菌)

2) 菌数測定用培地及び培養条件

SCDLP寒天培地[日本製薬株式会社], 混釈平板培養法, 35 °C ± 1 °C, 2日間

3) 試験菌液の調製

試験菌①:

SCD寒天培地[栄研化学株式会社]で30 °C ± 1 °C, 7~10日間培養した試験菌の菌体を生理食塩水に懸濁させ, 70 °C ± 1 °C, 20分間加熱し, 栄養細胞を死滅させた。この懸濁液を遠心分離して上澄み液を除いた後, 菌体を精製水に懸濁させ, 菌数が約 10^8 /mlとなるように調製し, 試験菌液とした。

試験菌②及び③:

試験菌を普通寒天培地[栄研化学株式会社]で35 °C ± 1 °C, 18~24時間培養した後, 生理食塩水に浮遊させ, 菌数が約 10^8 /mlとなるように調製し, 試験菌液とした。

4) 試験操作

検体10 mlに試験菌液を0.1 ml接種し、試験液とした。室温で保存し、1分後(試験菌①は1, 5, 15及び20分後)に試験液をSCDLP培地[日本製薬株式会社]を用いて直ちに10倍に希釈した。この希釈液の生菌数を菌数測定用培地を用いて測定した。

なお、対照として、精製水(黄色ブドウ球菌は生理食塩水)を用いて同様に試験し、開始時についても生菌数を測定した。

以 上